

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

動物のドメスティケーション：
「野鶏」の飼い馴らしは可能か？：
タイ北部の山地農民の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信, 増野, 高司, 中井, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001150

「野鷄」の飼い馴らしは可能か？

——タイ北部の山地農民の事例——

池谷 和信・増野 高司・中井 信介

国立民族学博物館

人が、どのような過程を経て野鷄を家禽化したのかという問いは、人類による家畜化全体を考えるうえで重要な課題である。本稿では、赤色野鷄が生息している地域に注目して、現在そこに暮らす人々がどのようにして野鷄を飼い馴らししているのかを把握する。具体的には、タイ北部の2つの山村を対象にして3名の野鷄の飼育者から、①捕獲時の状況、②飼育方法、③飼育目的について把握した。まず、ヤオ族の村でオス2羽、モン族の村でオスとメスのそれぞれ1羽の野鷄が飼い馴らされているのを確認した。そして、①野鷄を捕獲した場所は林地内か果樹園かであったが、飼育者はいずれも偶然に野鷄に出会っていた。合計3事例のうち、2事例では親鳥には逃げられたが、一緒にいたヒナの一部を捕獲することに成功していた。残りの1事例では、ある程度成長した野鷄が捕獲されていた。また、②野鷄の飼育方法では、野鷄の餌としてトウモロコシや米が使われている。そして、野鷄の年齢（1ヵ月から3才）に応じて、それを籠に入れたり、木にとまらせたり、放し飼いにするなど異なっている。野鷄はとても神経質でそれを人の管理下に置くことが非常に困難であるといわれるが、同じ野鷄でも、個体によってその性質は異なることが推察される。③飼育目的として、野鷄狩猟の際に使われるおとりを育成することが挙げられる。このおとりとは、野鷄と形や色や鳴き声が似ているものがふさわしいといわれ、野鷄と家鷄との交配によって生まれやすいと考えられている。以上のことから、野鷄を捕獲して飼い馴らす過程について、事例により共通する点と異なる点が示され、今後さらに現地調査からの多くの事例収集が必要と考えられた。

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 はじめに | 3.2.3 飼い馴らしの目的 |
| 2 野鷄と山地農民 | 3.2.4 羽の色の月別変化 |
| 2.1 野鷄の呼称と生態 | 3.3 S氏が飼育するオス野鷄（ヤオ族）【事例3】 |
| 2.2 野鷄の捕獲と飼い慣らしの経験 | 3.3.1 捕獲時の状況 |
| 3 野鷄を飼い馴らす方法 | 3.3.2 飼育の方法 |
| 3.1 X氏が飼育するオスとメスの野鷄（モン族）【事例1】 | 3.3.3 飼い馴らしの目的 |
| 3.1.1 捕獲時の状況 | 4 家禽化のプロセス |
| 3.1.2 飼育の方法と給与される餌 | 4.1 「野鷄」を飼い馴らす過程のモデル |
| 3.1.3 飼い馴らしの目的 | 4.2 家鷄が森に逃げ出した経験 |
| 3.1.4 羽の色の月別変化 | 4.3 出作り小屋における家鷄と野鷄の交雑 |
| 3.2 K氏が飼育するオス野鷄（ヤオ族）【事例2】 | 4.4 集落内に野鷄が訪れた事例 |
| 3.2.1 捕獲時の状況 | 5 まとめ |
| 3.2.2 飼育の方法 | |

*キーワード：野鷄、家鷄、家禽化、飼い馴らす、飼育、山地農民

1 はじめに

世界には赤色野鶏、灰色野鶏、セイロン野鶏、緑襟野鶏という4種類の野鶏が生息するといわれる(図1参照)。このなかで赤色野鶏(*Gallus gallus*, 以下、野鶏と呼ぶ)は、海南島、中国南部、東南アジア全般から南アジアにかけての広範な地域に分布する。また、野鶏は、家鶏の原種であると考えられており、家鶏の成立を考察するうえでまさに生きた情報を提供してくれるものである(岡本 2001)。このような家鶏の起源については、赤色野鶏がその起源であるとチャールズ・ダーウィンが提唱して以来、他の野鶏にもその可能性があるという多元説を支持する人々がいる一方で、近年ではミトコンドリアDNAの分析から、家鶏の祖先は赤色野鶏に由来するという考え方が強くなってきている(秋篠宮 2000; 2008)。その一方で、野鶏の家禽化のプロセスをめぐる研究はあまり進んでいない。これまでに、動物考古学的研究からBC6000年の中国やBC2000年のインドにおいて家鶏の骨が出土することから、それ以前に家禽化が起きたと推定されている(West and Zhou 1988)。しかし、野鶏の骨が遺跡から発見されていないこともあって、家禽化の場所やその年代については依然として明らかにはなっていない。そして、先行研究によって、次のような鶏の家禽化モデルがよく知られている。家禽化の過程は、人と野鶏との出会いから始まって人の介入が起り、半家禽化をへたのちに、用途別に固定化する道か再野生化の道をへて用途別に固定化していき家禽が成立すると説明されている(秋篠宮 2000; 2008)。

筆者らは、家禽化の場所やそのプロセスに関心を持っているが、現在の野鶏と人の関

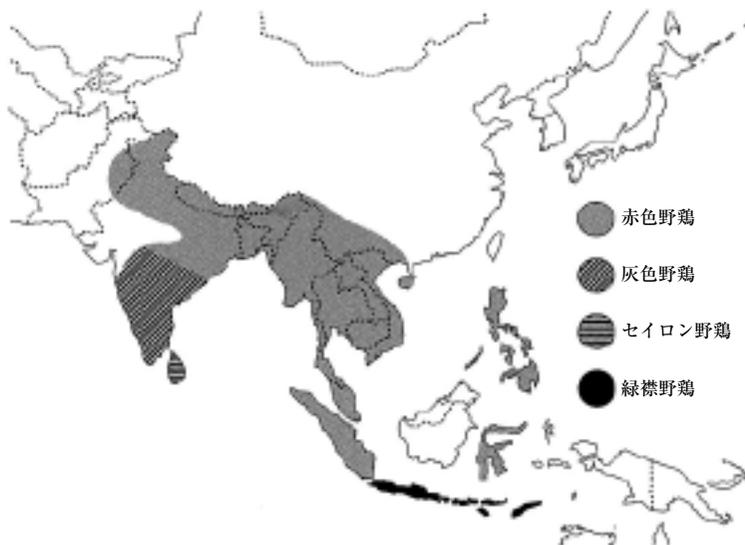


図1 野鶏の生息域 (出所: 岡本 2001)

係を把握する民族学（文化人類学）的研究からは、容易にその問いには答えることはできない。しかし、野鶏と人とのかかわり方を現地ではつぶさに観察し記述することから、どのような過程を経て人が野鶏を家禽化したのか、という問いへのヒントとなる資料を提示することはできるであろう。

現在でも赤色野鶏が生息しているタイおよび、その周辺国において、地域住民は野鶏を食用にするために狩猟をおこなうことを通して、野鶏と密接にかかわって暮らしてきた（秋道 2005; 池谷 2006; 増野・池谷 2006; 池谷・川野・秋道 2008）。同時に、野鶏は警戒心が強く人にはほとんど馴れないといわれる一方で（岡本 2001）、住民が捕獲した野鶏を飼い馴らすこともあるといわれる（高田 2005; 池谷・増野 2006; 高田・大島 2008）。

そこで本稿では、現在でも赤色野鶏が生息している地域に注目して、そこに暮らす人々がどのようにして野鶏を飼い馴らしているのかを把握することを目的とする。具体的には、タイ北部の山村に暮らし野鶏を飼い馴らしている人々を対象にして、野鶏捕獲時の状況、野鶏を飼い馴らす方法、野鶏を飼い馴らす目的について把握する。筆者らは、これまでタイ北部ナン県（Nan province）のモン族の村およびパヤオ県（Phayao province）のヤオ（ミエン）族の村において現地調査を行ってきた（図2）。現地調査では、野鶏の形態や体色変化を観察すると同時に、野鶏を飼い馴らしている人々の野鶏への関与の仕方やその変化を観察した。

このように本稿は、現地でのフィールドワークに基づく民族学からのアプローチによる研究として、最終的には家禽化のプロセスモデルを提示することを目的としているが、現時点では、「野鶏の狩猟」¹⁾、「野鶏の飼い馴らし」²⁾、「家鶏の飼育」という3つの段階を設定して、それぞれの基本資料の収集を行っている。なかでも本稿は「野鶏の飼い馴

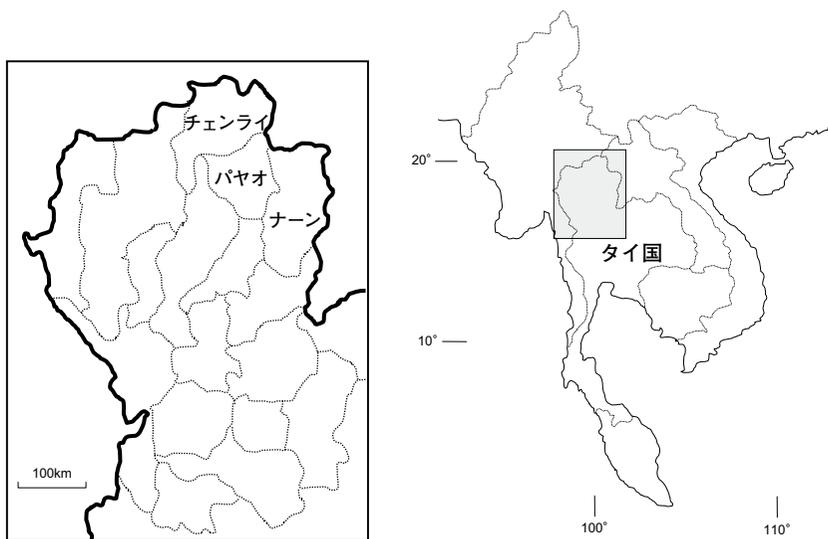


図2 調査地

らし」を半家禽化としてとらえて、その段階に焦点をおいている。おそらく、野鷄から家鷄への家禽化のプロセスを考える際には、3つのなかの各段階における行動・行動圏、人への警戒心、形態（羽の色や骨格など）、鳴き声ほかを把握して、それぞれを比較する必要がある³⁾。しかし、実際には、どこまでが野鷄で、どこからが家鷄であるかをこれらの指標から定めるのは非常に困難なことであるといわれる（秋篠宮 2008）。そのため本稿では、遺伝学的な研究アプローチによる野鷄の判断は保留し、地域住民が畑や山から捕獲してきて野鷄と呼ぶものを野鷄として論をすすめる。

2 野鷄と山地農民

2.1 野鷄の呼称と生態

タイ北部の山地には、アカ、リス、ラフ、カレン、モン、ヤオといった、いわゆる山地農民が暮らしていることが知られているが、筆者らはこのうちの、モンとヤオに焦点を当て、3つの集落を対象にして現地調査を行なった。調査を行ったナーン県の村は主にモン族、パヤオ県の村はヤオ（ミエン）族から構成されている。また、2つの民族はもともと中国南部に暮らしていたが、タイ北部には19世紀以降に移住してきた人々である点で共通している。調査地の3つの村における家畜飼育の概要をみると、鶏と豚が共通して見られ、牛が集落の一部にみられる⁴⁾。

さて、鶏はモン語で Qaib (カイ) という⁵⁾。野鷄はモン語で Qaib qus (カイ・クー) もしくは Qaib teb (カイ・テェ) という。ここで、カイ・クーのクーは「人と出会うと逃げるもの」を意味し、直訳すれば「人と出会うと逃げる鶏」となる。またカイテェのテェは「畑」を意味し、直訳すれば畑の鶏となる。鶏のオスとメスについては、オスは Hlau qaib (フラオ・カイ)、メスは Poj qaib (ポ・カイ) という。野鷄のオスとメスについても同様に区別され、たとえば野鷄のオスの場合、Hlau qaib qus (フラオ・カイクー) という。また、狩猟で利用されるおとり鶏のことを Qaib dib (カイ・ディ) という。

その一方で、鶏はヤオ語で Jai (チェー) という。野鷄はヤオ語で一般に nx'g-Jai (ノツ・チェー) と呼ばれ、hiad-Jai (ヒア・チェー) と呼ぶこともできる。ここでノツ・チェーのノツは「鳥」を意味している。またヒア・チェーのヒアは「野生の」もしくは「飼いならされていない」ことを意味し、直訳すれば野生の鶏、もしくは飼いならされていない鶏となる（増野 2006）。また、普段の生活で野鷄を呼ぶときにはノツ・チェーという言葉が用いられている。鶏のオスとメスについては、オスは Jai-kxvj (チェコン)、メスは Jai-Eeid (チェニエ) という。野鷄の場合も同様で、オスの野鷄は nx'g-Jai-kxvj (ノンチェーコン) という。また狩猟で利用されるおとり鶏のことを Jai-txq (チェッテー) という。

野鷄を対象にした狩猟はタイ北部で広く行われてきている。ここでは、パヤオ県のヤオ族の A 集落での事例を紹介しておこう（池谷 2006; 増野・池谷 2006）。猟師は、野

鶏の生態を熟知しており、野鷄は神経質であり、それを人の管理下に置くことは非常に困難であるとみている。乾季（11-5月）である2-4月の繁殖期にはオスのみが鳴くので存在がわかるため、猟はその時期のみ行われる。また、繁殖期にはオスが中心になってナワバリをつくるので、猟の際にオスの家鶏であるおとりをつれていくと、ナワバリをおかさされたと思って野鷄のオスが近づいてくるという。なお、チェンライ県の野鷄の生態については次のような報告がある。雨季と乾季では生態の変化が認められ、なかでも繁殖期にはオスと数羽のメスから構成される群れがつけられるという。また、野鷄の乾季の行動半径は、雨季よりも小さいという。そして時を示す声をあげるのは、リーダーのオスのみである（大島・高田・川嶋 2006）。

以上のようにタイ北部の山地農民は、野鷄について「人と出会うと逃げる鷄」、「畑の鷄」、「飼いや馴らされていない鷄」などと野鷄を認識しており、野鷄を対象にした狩猟を維持することをとおして野鷄の生態に関する知識を保持してきている。

2.2 野鷄の捕獲と飼いや馴らしの経験

ここでは冒頭で述べたように、野鷄は警戒心が強く人にはほとんど馴れないといわれることから、野鷄の捕獲と飼いや馴らしはいったい可能であるのか？ またそれが可能であるとすると、狩猟を除いての野鷄の捕獲およびその卵の採集が、村レベルでどの程度おこなわれているのかを、バヤオ県のA集落の事例に焦点を当てて把握する。A集落の人口は約130名を示し、ヤオ族が暮らしている。現地調査は、2007年8月に聞き取り調査という形で各家の世帯主に対して行われた。調査に際しては、野鷄の成鳥を含めたものであったが、全事例において生けどりされた野鷄はヒナであった。

まず、ヒナを捕獲した経験の有無では、32名の世帯主のうち13名がヒナを捕獲した経験があり、3名が卵を採集したことがあるが、のこりの16名は捕獲の経験がみられなかった（図3）。なかでも13名の捕獲経験者のうち11名が男性であり、女性はわずか2名

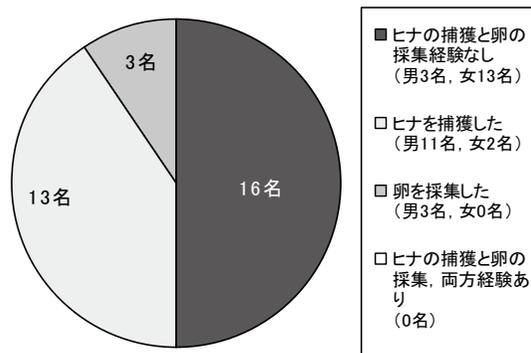


図3 野鷄のヒナの捕獲もしくは卵を採集した経験の有無
 注) 野鷄捕獲の事例はすべてヒナでの捕獲。調査対象は32名。
 出所：筆者の聞き取り調査（2007年8月）

であった。また、同様に13名のヒナの捕獲経験者に注目すると、合計で27回にわたる捕獲時のヒナの数には1から5羽にわたり、2羽が最も多いことがわかる(図4)。13名の各人の捕獲回数では、2回が7人でもっとも多く、1回が3人、3回が2人、4回が1人となっていた(図5)。野鷄ヒナの捕獲時の状況をみると、狩猟に出ていたのが27例のうち11例でもっとも多く、そのうち7例は野鷄猟の際に捕獲している。また、畑への移動中に遭遇したのが10例とつづいた(表1)。

つぎに、これまでに野鷄を捕獲した人のなかには、狩猟用のおとりを生ませるために

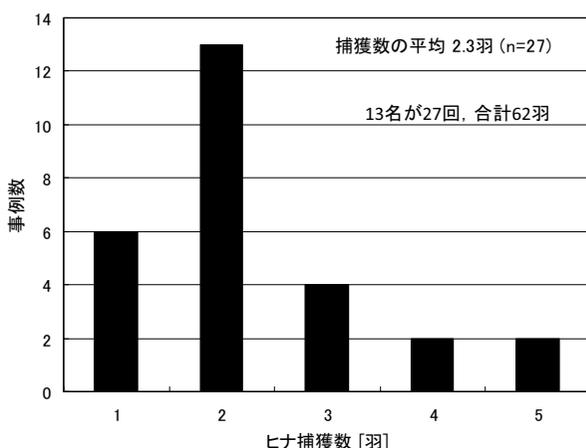


図4 1回に捕獲した野鷄ヒナの数
注) 調査対象は野鷄を捕獲した13名。
出所: 筆者の聞き取り調査 (2007年8月)

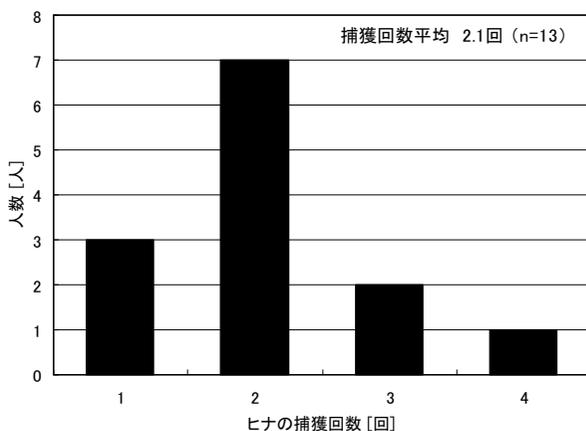


図5 各人の野鷄ヒナの捕獲回数
注) 調査対象は野鷄を捕獲した13名。
出所: 筆者の聞き取り調査 (2007年8月)

表1 野鷄ヒナ捕獲時の状況とその事例数

状 況	事例数	備 考
狩猟中	11	野鷄雛：7事例
畑への移動中（と思われるものも含む）	10	車道での遭遇：2事例， 踏み分け道での遭遇：8事例
畑で草刈り中	1	
林内放牧のウシ探索中	2	2事例とも銃を持っていた
不 明	3	
合 計	27	

出所：筆者の聞き取り調査（2007年8月）



写真1 野鷄のヒナ

注) ヤオ族のA集落における事例。(2008年3月撮影)

飼育した人もいたので、飼育をした人について野鷄ヒナの飼育日数をみてみよう（写真1）。もっとも長く飼育できた期間は約60日が1例あり、その次に多いのが14日と10日であり、それぞれ2例あるにすぎない（図6）。しかも、10日の方の1例は死亡ではなくてヒナの逃亡によっている。図6で示されているように、多くの野鷄ヒナは、4日以内で死亡していることがわかる。つまり、A集落の13名の村民が合計62羽の野鷄のヒナを持ち帰ったにもかかわらず、ヒナの飼い馴らしには1羽も成功していない。また、野鷄を捕獲する目的は、合計で13名中の9名が、狩猟の際のおとりとしての利用に言及しており、2名がおとりとしては利用せずに食用のために、1名が家鷄と交雑させ

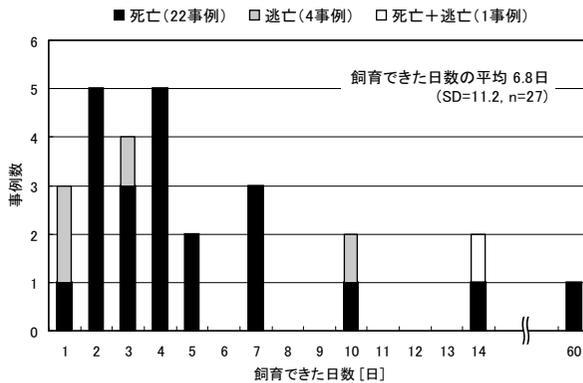


図6 捕獲した野鷄を飼育できた日数および飼育が継続できなかった理由
 注) 調査対象は野鷄を捕獲した13名。
 出所：筆者の聞き取り調査 (2007年8月)

表2 捕獲した人による野鷄ヒナの利用目的

目的	人数	備考
おとり (目的として言及)	9	おとりとしての利用が第一の目的：7名 見て楽しむ+おとり利用：2名
食用	2	おとりとして利用しないと言及。
家鶏と交配	1	野鷄は家鶏より丈夫なので、丈夫な鶏が生まれる。
特になし	1	子供の頃の経験。飼育してみたかった。
合計	13	

出所：筆者の聞き取り調査 (2007年8月)

丈夫な鶏を産むために必要としている (表2)。

以上のように、A集落のような、ひとつの村において野鷄の捕獲と飼い慣らしの経験についての情報を集めてみると、長い期間にわたって野鷄ヒナを飼い馴らすことがいかに困難であることがわかる。8割以上の事例において、野鷄ヒナは捕獲後1週間までに一部は逃亡し多くは死亡してしまうということが明らかになった。つまり、次章で詳細に述べるように、野鷄ヒナの飼い馴らしを成功させた事例は、本当にまれにしかみられない。

3 野鷄を飼い馴らす方法

筆者らは、タイ北部の山村をまわり、野鷄の飼い馴らし事例を集めるように努めたが、大部分は野鷄の飼い馴らしをしていない村であった。2007年10月において、ナーン県のあるモン族のB集落では野鷄を飼い馴らす人が1人 (X氏) いた。また、パヤオ県のあるヤオ (ミエン) 族のC集落では野鷄を飼い馴らす人が2人 (K氏およびS氏) いた。

3.1 X氏が飼育するオスとメスの野鷄（モン族）【事例1】

タイ北部のナーン県のX氏の家で飼育されているオスとメスの野鷄を、それぞれ一羽ずつ確認した。

3.1.1 捕獲時の状況

2005年5月にX氏の息子（32才）は、ライチ畑の下草を食べる牛の様子を見に行った。その際に、野鷄がライチ畑のライチの木に巣を作っていた（写真2）。彼は、その場所で親鳥を取り逃がしたが、5羽のヒナを捕まえた。その後、3羽はすぐに死んでしまい（3羽の性別については不明）、現在いる2羽（オス1羽、メス1羽）が生き残った。以下、これらを野鷄A（オス）と野鷄B（メス）と呼ぶことにする。



写真2 野鷄のヒナを捕まえた果樹畑（ライチ）

注）モン族のB集落におけるX氏の事例。矢印は、捕獲地の果樹畑を表す。

3.1.2 飼育の方法と給与される餌

2006年4月25日にX氏の家において野鷄Aと野鷄Bは、地面からおおよそ50cmの高さに固定された、竹で編んだ箱型の籠に2羽共に入れて飼育されている（写真3）。両者とも籠の中で常に飛び回っているため、羽は2羽ともに傷ついている。筆者が写真を撮影する際には、X氏の息子が籠から野鷄を取り出し、オスとメスの片足同士をヒモでくくりつけた。平素は、2羽の野鷄の飼育にヒモは使われていない。餌は1日1回を目処にトウモロコシもしくは米が与えられている（写真4）。トウモロコシは、石臼で挽いて細かく砕いて与えられる場合もある。なお、2007年10月においても、飼育の方法に変化はなく竹の籠が使われている。

ここで、2羽の野鷄に与えられていた餌について詳述する。調査は、2006年9月13



写真3 籠の中で飼育される「野鶏A」と「野鶏B」

注) モン族のB集落におけるX氏の事例。野鶏A(オス)と野鶏B(メス)は約1才。
籠の中では自由に動くことができる。羽が傷ついている。(2006年4月25日撮影)



モミ付き米



トウモロコシ



精米



炊飯米

写真4 野鶏に給与された4種類の餌

表3 野鷄に給与された餌

給与機会 番号	日 時	給与された餌				給餌者		
		トウモロコシ	モミ付き米	精米	炊飯米	父	母	息子
1	9月13日 朝 昼 夜		○				○	
2	9月14日 朝 昼 夜	○					○	
3	9月15日 朝 昼 夜	○						○
4	9月16日 朝 昼 夜				○		○	
5	9月17日 朝 昼 夜			○			○	
6	9月18日 朝 昼 夜		○				○	
7	9月19日 朝 昼 夜			○				○

出所：筆者の現地調査（2006年9月）

日から9月19日までの7日間行った。飼育は竹籠内で行われ、プラスチック製の容器が2つ設置され、一方に水、もう一方に餌が与えられた。表3に示したように、7日間の間には7回餌が与えられた。たとえば、2006年9月13日の場合、X氏の妻によりモミ付き米が、その翌日には、同じくX氏の妻によりトウモロコシの粒が与えられた。

このように、7日間の餌をみてもみると、モミ付き米、トウモロコシ、炊飯米、精米、の4種類の餌が使われており、それぞれ、2回のモミ付き米、2回のトウモロコシ、1回の炊飯米、2回の精米が与えられていた。与えられた時期は朝方5回、昼1回、夕方1回だった。餌の給与はX氏の妻により5回、X氏の息子により2回行われた。また、餌を与える頻度についてみると、餌が1日に1度給与された日が5日、2度給与された日が1日、1度も給与されない日が1日あった。

3.1.3 飼い馴らしの目的

2006年4月から同年12月における現地調査の際に、飼育中の野鷄Aと野鷄Bを交配すると聞いていた。しかし、飼育をはじめてから1年以上たった2007年10月の調査時点において同じ竹籠のなかでの野鷄同士の交配は実現をしていない。

3.1.4 羽の色の月別変化

野鶏 A と野鶏 B について、2006年 4 月から12月にかけておよそ 1 ヶ月おきに写真撮影を行った（写真 5 および写真 6 参照）。両者とも、4 月25日、6 月19日、7 月22日、8 月18日、9 月19日、10月21日、12月21日の写真を示している。2 羽の羽の色を 9 ヶ月にわたって観察すると、オスの野鶏 A については 9 月19日に首元に赤色の羽が生え始め、10月21日と12月21日にはさらにその羽が伸びていることがわかる（写真 5）。これに対して、メスの野鶏 B については調査期間の 9 ヶ月間においてその羽色に変化はみられなかった（写真 6）。

3.2 K 氏が飼育するオス野鶏（ヤオ族）【事例 2】

先述したように、タイ北部のパヤオ県で C 集落の K 氏（26 才）の家では、オスの野鶏（野鶏 C）を 1 羽飼育している⁶⁾。

3.2.1 捕獲時の状況

K 氏は、2005年の 5 月頃に、村のリュウガンの果樹園で野鶏を捕獲した。彼が野鶏を発見し、これを追ったところ、野鶏は棘の多いマメ科の植物（休憩中の畑など、日当たりの良い開けた場所に群生する）の群落に入り込み身動きができなくなった。彼はそれを素手で捕まえた。その野鶏は、ヒナではなく、すでにある程度成長していたという。

3.2.2 飼育の方法

2005年11月、野鶏は彼の家の裏庭で籠の中で飼育されていた。野鶏の脚と籠は、終日ひもで結ばれている（写真 7）。野鶏には餌として、トウモロコシ、モミ付き米、炊飯米を与えていた。2006年 3 月には、野鶏はネットでおおわれた木の上で飼育されていた（写真 8）。右足は、ひもでしばられている。2006年 5 月には、彼の家の裏庭にある鶏小屋のなかで飼育されていた。そして、2008年 3 月には、高床の倉庫の下の部分を囲いでおおい、その中で飼われていた。そこにはメスの家鶏がいて、交配が試みられていた。

3.2.3 飼い馴らしの目的

2006年当初、K 氏の家では交雑個体は生まれていなかった。彼によると、交雑個体を作ろうとしているが、まだ成功していないとのことである。しかし、2007年 8 月および2008年 3 月の現地調査では、それぞれの時に交雑個体が生まれていた。前者では、5 羽生まれて、2 羽死亡、1 羽は贈与したので、2 羽が残っている。後者では、5 羽生まれて、1 羽死亡したので 4 羽残っているという。これらのなかでふさわしいものを選び、野鶏をとる猟の際におとりとして用いる計画でいる。



2006年 4月25日

2006年 6月19日

2006年 7月22日

2006年 8月18日



2006年 9月19日

2006年10月21日

2006年12月21日

写真5 「野鷄 A (オス)」の羽色の変化

注) 2005年 5月にヒナとして捕獲。平素はヒモなしで、籠内で飼育。
撮影時のみ籠から出して、足にヒモを付けて撮影した。



2006年 4月25日

2006年 6月19日

2006年 7月22日

2006年 8月18日



2006年 9月19日

2006年10月21日

2006年12月21日

写真6 「野鷄 B (メス)」の羽色の変化

注) 2005年 5月にヒナとして捕獲。平素はヒモなしで、籠内で飼育。
撮影時のみ籠から出して、足にヒモを付けて撮影した。



写真9 「野鶏 C (オス)」の羽色の変化
 注) 2005年5月にヒナよりある程度成長した状態で捕獲



写真10 放し飼いで飼育される「野鶏 D」
 注) ヤオ族の C 集落における S 氏の事例。野鶏 D (オス) は約 3 ~ 4 才。
 2002年にヒナとして捕獲。(2005年11月撮影)



写真7 籠の中で飼育される「野鶏 C」

注) ヤオ族の C 集落における K 氏の事例。「野鶏 C (オス)」は約1.5~2才。
脚とカゴは終日ヒモで結ばれている。(2005年11月1日撮影)



写真8 木の上で飼育される「野鶏 C」

注) 2005年5月に捕獲。(2006年3月撮影)

3.2.4 羽の色の月別変化

野鷄Cについても、2005年11月から2008年3月にかけて、不定期ではあるが写真撮影を行った(写真9参照)。ここでは、2005年11月8日、2006年2月4日、3月26日、5月14日、2007年3月15日、8月18日、2008年3月25日における野鷄Cの写真が示されている。これらの写真から、青みがかった部分の羽の色が変化をしていることがわかる。ただ、この個体はとさかの部分が比較的大きく、形態学の専門家によると形態的には野鷄ではないという。なお、飼育者は野鷄Cの場合、雨季には尾羽が落ちていたと言っていた。

3.3 S氏が飼育するオス野鷄(ヤオ族)【事例3】

3.3.1 捕獲時の状況

タイ北部のパヤオ県にあるC集落のS氏は、2002年、特定の獲物を求めずに独りで猟に出ている際に、野鷄Dを捕獲した。彼が林内を歩いている際に、野鷄のメスとそのヒナ数羽と遭遇し、オスとメスの合計2羽のヒナを素手で捕獲したのだという。S氏はこの2羽のヒナを家に持ち帰り飼育を始めた。メスの野鷄は、飼育してある程度成長したが、成熟する前に死んでしまった。

3.3.2 飼育の方法

オスの野鷄の飼育には成功し、この個体が現在まで飼育されている(野鷄D)。野鷄Dは、昼夜にかかわらず放し飼いにされている(写真10)。野鷄Dには餌として、トウモロコシと精米を与えている。この野鷄Dは、3年間飼育されているにもかかわらず、人が近づくと一定の距離を保ちながら、飛んで逃げてしまう。S氏によると、野鷄は人が近づくと困難である点と、逃げる際に飛ぶ点で家鶏と異なるという。また、無理に野鷄を鶏小屋に入れた場合、野鷄が餌を食べなくなってしまうため、野鷄は放し飼いにせざるをえないという。

野鷄Dは昼間には鶏小屋を離れて、どこかへ行ってしまふ。しかし、夕方になると自分でS氏の家に戻ってくる。野鷄Dは毎晩同じ場所で夜を過ごす。以前は、S氏の庭の樹上で夜を過ごしていた。しかし、S氏が野鷄Dを移動させるために、樹上で寝ているところを棒で追い回して以降、野鷄DはS氏の家鶏が利用している鶏小屋と、その屋根の隙間で夜を過ごすようになっている。

3.3.3 飼育の目的

野鷄Dを飼育して3年が経過していることから、すでに複数の同胞および腹違いの交雑個体が生まれている。野鷄は放し飼いにされていることから、これらの交雑個体はS氏が飼育している野鷄と家鶏とが自然に交配して生まれたものである。2005年11月に

は、オスの交雑個体が3羽飼育されているとのことだった。実際にオスの交雑個体を2羽確認することができた。交雑個体は野鷲よりも飛ぶことが下手であるという。また、オスの交雑個体は、野鷲猟で利用されるおとり用鷲 (decoy chicken) として利用できるとのことだった。しかし2005年11月には、これらの交雑個体は、おとり用鷲として利用されていないかった。

4 家禽化のプロセス

冒頭で述べたように野鷲から家禽への変化の過程は単純ではない。野鷲への人の介入が生じたあとに半家禽化が起きて再野生化や再家禽化を繰り返して家禽が成立するといわれる (秋篠宮 2000)。ここでは、これまで述べてきた住民による飼育馴らしの技術をまとめてみよう。また、家鷲が森に逃げ出した経験を紹介することで再野生化はどの程度に起こりうるのかを把握する。

4.1 「野鷲」を飼育馴らす過程のモデル

表4は、上述してきた野鷲の捕獲事例をまとめたものである。3つの事例ではあるが、捕獲場所は畑か林内に分かれ、対象はヒナかヒナより大きいもので、捕獲した個体数は1羽から5羽に及ぶが、実際に生存したものは多くない。

これまでモン族およびヤオ族の飼育馴らしに関する3つの事例を記述してきたが、3つの事例から野鷲を飼育馴らす過程のモデルを考えてみよう (図7)。

【事例1】X氏 (モン族) が世話をするオスとメスの野鷲では、竹で編んだ籠の中で飼育されていた。また、餌にはトウモロコシと精米、モミ付き米、炊飯米が使われていた。次に、【事例2】K氏 (ヤオ族) が飼育しているオス野鷲では、籠の中で飼うことから始まり、木の上での飼育に移っている。籠の中では、足と籠をヒモでしばっていた。その際の餌は、トウモロコシ、米ぬか、炊飯米である。最後に【事例3】S氏 (ヤオ族) が飼育しているオス野鷲では、ヒナのときに捕獲されて、現在は放し飼いにされている。餌はトウモロコシと精米である。この野鷲は餌を与える際に近づいてくる。そして寝場所は固定されている。

表4 野鷲捕獲事例のまとめ

事例番号	時期	場所	対象 (n)	個体数 (n)	生存個体数 (%)	生存率
1	2005年5月	果樹畑 (ライチ)	ヒナ	5	2 (オス・メス)	40
2	2005年5月	果樹畑 (リュウガン)	ヒナより大	1	1 (オス)	100
3	2002年	林内	ヒナ	2	1 (オス)	50

出所：筆者の現地調査

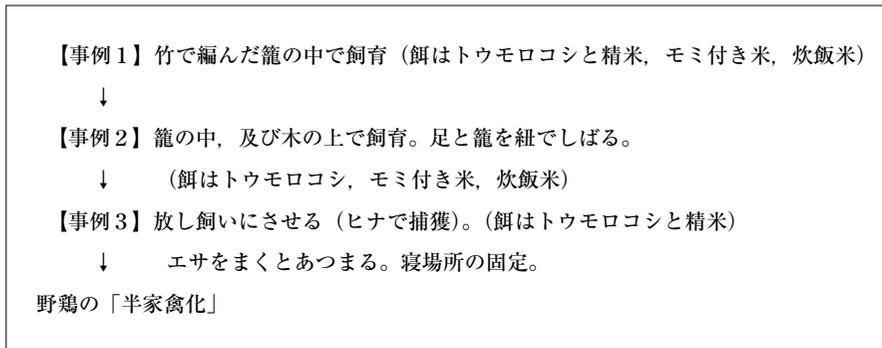


図7 「野鷄」を飼い馴らす過程のモデル

ここで問題になるのが【事例2】から【事例3】への変化の可能性である。例えば，【事例2】では，2008年3月の時点における筆者らの調査において，生後およそ3年近くたっているが，いまだに放し飼いにすることはない。また，タイ北部のタイ族を調査した新谷によれば，捕獲して2年の野鷄は籠から出すと森に帰ってしまうという。森に帰らなくなるまでには，5～6年はかかるという（新谷 私信）。このように，どのくらいの期間を経ることで，野鷄の放し飼いが可能となるのかについては，まだ基本資料が乏しい。

4.2 家鷄が森に逃げ出した経験

家禽化のモデルを考える際には，家禽の野生化についても考える必要があろう。そこで，野鷄の飼育がほとんど成功しなかった，ヤオ族の山村A集落において32名の人々を対象にした聞き取り調査を行った。その結果，以下の2名の人々は家鷄が森に逃げ出した経験を持っていた。

【事例4】

1980年代に畑の出作り小屋にいた頃，出作り小屋で飼育していた家鷄が森に出ていった。生死は不明であるが，餌の虫なんかはたくさんいるし，きっと死んでいないと思う。また野鷄が出作り小屋にやってくることはあったが，捕獲できなかった。（30代 男性）

【事例5】

2005年に，畑で家鷄を飼育したとき。畑での飼育をやめるので，家鷄を捕獲したが1羽捕まえられなかった。その家鷄は木の上にあった。1ヶ月ぐらひはみかけたが，その後どうなったかは知らない。（50代 女性）

これらのことから、家鷄が森へ逃げ出した経験は32名のうちの2名であった。これが多いのか少ないのかの判断はできないが、家鷄の野生化が起きている可能性がある。しかし、聞き取り調査において、村人達は、「家鷄は集落から離れない」、「家鷄が森へ行ったらすぐに野生動物に食べられてしまう」ということを述べ、総じて家鷄が森へ逃げ出して生活することへは否定的だった。これは、村人達のなかで、明らかに家鷄と判断されるような鷄を森の中でみた経験を持つものがいないことが根拠となっている。上で挙げた【事例4】においても、逃げ出した後の家鷄についての確かな情報は得られていない。また、【事例5】の話者も、1ヵ月ぐらい見かけた後のことについて、確かな情報がないというだけで、家鷄がそのまま生き延びているとは思っていない。

これらのことを総合すると、飼育されていた家鷄が森へ逃げ出して野生化するのには、鷄を補食する野生動物が見られない場所などという条件でもない限り、可能性としてゼロではないが、かなり困難なことだと捉えておくべきだろう。

4.3 出作り小屋における家鷄と野鷄の交雑

家鷄の野生化が生じなくても、畑のある出作り小屋において家鷄と野鷄の交雑が行われる。ナーン県のモン族のB集落の事例をみてみよう。

2006年10月、D氏は集落から約7km離れた畑で家鷄を飼育している。D氏は、ときおり畑の出作り小屋で泊まりながら農耕を行っている。朝や夕方、家鷄にトウモロコシ(換金用と自給用双方)、米(もみ付き米、精米、炊飯後の残米)などの餌を与えていると野鷄が近づいてくることがあるという。その結果、2004年には畑において野鷄(オス)と家鷄(メス)の交雑と考えられる個体が6羽生まれている。このうち4羽はすぐに死んでしまったので、雌雄は不明である。生き残った2羽のオスについては、2006年10月18日には、集落内にあるD氏の家の軒先で、足をヒモで結ばれて飼育されていた。

このことから、野鷄と家鷄との関係は複雑であることがわかる。住民が捕獲した野鷄であっても、遺伝的に純粋なものは少ないかもしれない。

4.4 集落内に野鷄が訪れた事例

野鷄と家鷄とが出会うのは、家鷄が森へ逃げた場合や、畑の出作り小屋で飼育される家鷄のところへ野鷄がやって来た場合には限られない。ここでは、ヤオ族のA集落における32名の人々を対象とした聞き取り調査で得られた、集落内での野鷄の目撃事例を示す。

【事例6】

去年(2006年)、村内のある家の裏でオスの野鷄と家鷄がいっしょにいるのを見た。おとりの鷄ではなかった。なぜかという、(私に気付いて)オスは逃げ去ったが、メ

スはその場に残った。おとりだったら逃げないという。

【事例7】

去年（2006年）、集落に隣接した未舗装の三叉路で、2羽のメスの野鶏と家鶏が一緒にいるのを（家の庭から）見た。人が近づいたら野鶏は森に逃げていき、家鶏はその場に残った（40代女性）。

このほかにも、家の裏の木に野鶏のオスがやってきたので、これを銃で撃ちに出た経験を持つ者など、集落内での野鶏の目撃例を持つ者がいる。今のところ、このような野鶏の集落への訪問による家鶏との交雑について、具体的な事例は確認できていない。しかしながら、数十年単位で考えるならば、村人の知らないうちに、野鶏と家鶏が交雑している可能性は十分にあるだろう。

5 まとめ

本稿では、赤色野鶏が生息している地域に注目して、現在そこに暮らす人々がどのようにして野鶏を飼いならしているのかを把握することを目的とした。具体的には、タイ北部の3つの山村を対象にして野鶏捕獲時の状況を調べた結果、A集落ではまったく飼育に成功できないぐらい飼育は困難なものであったが、B集落およびC集落では3名の野鶏の飼育者を見つけることができ、野鶏捕獲時の状況、野鶏飼育の方法、野鶏飼育の目的について把握した⁷⁾。

その結果、以下のような4点が明らかになった。

- 1) タイ北部の山地には、ヤオ族の村（C集落）でオス2羽、モン族の村（B集落）でオスとメスのそれぞれ1羽の野鶏が飼育されているのを確認した。野鶏の飼育者は、集落の人口350～630人のなかでわずか1～2人にすぎない。彼らは、いずれも男性であること、農閑期には野鶏の狩猟をする点で共通している。
- 2) 野鶏を捕獲した場所は、林地内もしくは果樹園（リュウガンやライチ）という2つのタイプがみられた。また、飼育者はいずれも偶然に野鶏に出くわしており、親鳥を逃がしてしまうことはあるが、それがヒナである場合は容易に捕獲している。
- 3) 野鶏の飼育方法では、野鶏の餌としてトウモロコシや米が使われている。また、野鶏の年齢（1ヵ月から3才）に応じて、それを籠に入れたり、木にとまらせたり、放し飼いにするなど異なっている。野鶏はとても神経質でそれを人の管理下に置くことが非常に困難であるといわれるが、籠や小屋を利用しての野鶏飼育に成功している。同じ野鶏でも、個体によってその性質は異なることが推察される。
- 4) 野鶏の飼育目的として、野鶏狩猟の際に使われるおとりを育成することが挙げ

られる。このおとりとは、野鷄と形や色や声が似ているものがふさわしいといわれ、野鷄と家鷄との交配によって生まれやすいと考えられている。しかし、現在においても、野鷄と家鷄との交配が成功している場合と、そうでない場合とがみられる。

以上のことから、タイ北部の山村での野鷄飼育は、民族集団による飼育の違いは認められず、一部の集落の一部の人が行っているにすぎないことがわかる。また、本稿において提示した資料のなかで、野鷄との偶然の出会いから籠のなかでの飼育が始まり、そこから放し飼いに变化する過程は、家禽化の過程を考える際に大いに参考になるものと考えている。

冒頭で述べたように、家禽化のプロセスは、「野鷄の狩猟」段階、「飼い馴らし」段階、「家禽としての管理」段階の、3つの段階を想定して考えることができる。本稿では、飼い馴らし段階に焦点を当てて、本稿におけるA集落の事例のようにその成功する確率はきわめて低いが、まれに野鷄のヒナを馴れさせることができることを示した。つまり、タイ北部の山村での野鷄飼育は、野鷄との偶然の出会いから籠のなかでの飼育が始まり、野鷄の年齢（1ヶ月から3才）に応じて、それを籠に入れたり、木にとまらせたり、放し飼いにするなど異なっているが、野鷄の年齢に応じたきめ細かな飼育技術の開発が重要と考えられた。また、家禽としての管理段階において、去勢技術といった技術の発達については、今後の課題として残されている。

最後に、野鷄と家鷄を分けることの難しさとそれを分けることの意義について言及しておこう。集団遺伝学でも、純粋な野鷄の存在について議論があるというが、冒頭で述べたように、タイ北部の山地農民は野鷄を、「人と出会うと逃げる鷄」、「畑の鷄」、「飼い馴らされていない鷄」などと認識している。彼らのいう「野鷄」は、必ずしも生物学的な種としての「純粋な野鷄」にあてはまるものではない。しかしながら、それでも地域住民の認識としての野鷄と家鷄が区別されている点は重要と考えられる。また、現在、純粋な野鷄が存在したとしても家禽化された当時の野鷄と、現在の野鷄のように銃による狩猟圧のもとでの野鷄とでは、行動や習性が異なる可能性もある点に注意する必要がある。

付 記

本稿は、人と鷄の多面的関係を把握することを目的としたプロジェクト（HCMR: Human-Chicken Multi-Relationships Research Project）の研究成果である。また本稿は、2007年6月の第17回日本熱帯生態学会年次大会（高知大学）、および総合研究大学院大学葉山高等研究センター・プロジェクトの研究会（「ドメスティケーション・モデルの構築—博物学の視点から」代表秋篠宮文仁）において報告した内容に大幅に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1) 多くの野生生物種は、集団中の特定の表現型のみを人間が好むために選択的な狩猟・採集圧を受けている (Frankham ほか 2007)。
- 2) 野生動物を家畜化していく際の第一歩は、飼い馴らすことにある (岡本 2001)。
- 3) 赤色野鶏の羽色が雨季には全体的に黒みを帯びているのに対して、乾季では鮮やかな赤黄色になることがわかっているが、飼育されている個体にも同様の変化が現れるか否かについてはまだ確認されていない (秋篠宮 2008: 67)。
- 4) モン族の B 集落では、1 戸あたりでみると、平均、ブタ4.1頭、鶏20.6羽、牛1.4頭が飼育されている (Nakai 2008)。
- 5) モン語のアルファベットによる発音表記は Heimbach (1969)、ヤオ語のアルファベットによる発音表記は、Lombard (1968) を用いた。
- 6) 形態学的には野鶏ではない可能性があるが、野鶏 C を飼育する K 氏は、野鶏 C を野鶏と認識している。このため本稿では、野鶏 C を「野鶏」とみなす。
- 7) 2008年10月の調査では、X 氏 (モン族) が飼育する野鶏 A (オス) と野鶏 B (メス)、および K 氏 (ヤオ族) が飼育する野鶏 C (オス) は死んでいた。S 氏 (ヤオ族) が飼育する野鶏 D (オス) は生きていた。

文 献

秋道智彌

2005 「変貌する森林と野鶏」池谷和信編『熱帯アジアの森の民』pp. 123-148, 京都: 人文書院。

秋篠宮文仁

2000 「鶏一家禽化のプロセス」秋篠宮文仁編『鶏と人—民族生物学の視点から』東京: 小学館。

2008 「鶏の家禽化」秋篠宮文仁・西野嘉章編『鳥学大全』pp. 44-70, 東京: 東京大学総合博物館。

秋篠宮文仁編

2000 『鶏と人—民族生物学の視点から』東京: 小学館。

Al-Nasser, A., H. Al-Khalifa, A. Al-Saffar, F. Khalil, M. Albahouh, G. Ragheb, A. Al-Haddad and M. Mashaly

2007 Overview of chicken taxonomy and domestication. *World's Poultry Science Journal* 63(2): 285-300.

Andersson, M., E. Nordin and P. Jensen

2001 Domestication effects on foraging strategies in fowl. *Applied Animal Behaviour Science* 72:51-62.

Frankham, R., J. D. Ballou, and D. A. Briscoe

2007 『保全遺伝学入門』高橋洋・山崎裕治・渡辺勝敏訳, 東京: 文一総合出版。

Fumihito, A., T. Miyake, S. Sumi, M. Takada, S. Ohno, and N. Kondo

1994 One Subspecies of the Red Junglefowl (*Gallus gallus gallus*) Suffices as the Matriarchic Ancestor of all Domestic Breeds. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 91(26): 12505-12509.

- Fumihito, A., T. Miyake, M. Takada, R. Shingu, T. Endo, T. Gojobori, N. Kondo, and S. Ohno
 1996 Monophyletic Origin and Unique Dispersal Patterns of Domestic Fowls. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 93(13): 6792-6795.
- Heimbach, E. E. (comp.)
 1969 *White Meo: English Dictionary*, Ithaca: Cornell University.
- 池谷和信
 2006 「タイ北部の山地農民ミエン（ヤオ）における狩猟活動—野鶏とイノシシの事例」『総合地球環境学研究所研究プロジェクト4-2 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005 2005年度報告書』pp. 4-9.
- Ikeya, K.
 2006 How were Red Junglefowl Domesticated?: Comparative Ethnological Approach among Northern Thailand's Local People. *Abstract of the 2006 HCMR Congress in Tokyo*. p. 32.
- 池谷和信・増野高司
 2006 「熱帯モンスーン地域における山地農民の狩猟—タイ北部の事例」『第16回日本熱帯生態学会年次大会 講演要旨集』p. 53.
- 池谷和信・川野和昭・秋道智彌
 2008 「多様な狩猟技術と変わりゆく狩猟文化」河野泰之編『モンスーンアジアの生態史—地域と地域をつなぐ—第1巻 生業の生態史』pp. 125-143, 東京：弘文堂。
- Jensen, P.
 2006 Domestication: From behavior to genes and back again. *Applied Animal Behavior Science* 97(1): 3-15.
- 加茂儀一
 1973 『家畜文化史』東京：法政大学出版局。
- Lombard (comp.)
 1968 *Yao-English Dictionary*. Ithaca: Cornell University.
- 増野高司
 2006 「タイ北部のヤオ（ミエン）族によるニワトリの民俗分類とその区分」『家禽資源研究会報』7: 20-24。
- 増野高司・池谷和信
 2006 「タイ北部における野鶏飼育について—ヤオ族の事例」『科学研究費基盤研究（A）生き物の形態とヒトとの関わり 2005年度中間研究報告書』pp. 59-61。
- Nakai, S.
 2008 Reproductive performance analysis of native pig smallholders in the hillside of northern Thailand. *Tropical Animal Health and Production* 40: 561-566.
- Nishida T., W. Rerkamnuaychoke, D. G. Tung, S. Saignaleus, S. Okamoto, Y. Kawamoto, J. Kimura, K. Kawabe, N. Tsunekawa, H. Otaka, and Y. Hayashi
 2000 Morphological Identification and Ecology of the Red Jungle Fowl in Thailand, Laos and Vietnam. *Animal science journal* 71(5): 470-480.
- 大島新人・高田 勝・川嶋 舟
 2006 「HCMR 2006年3月 調査報告」家禽資源研究会報 6: 8-12。

岡本 新

2001 『ニワトリの動物学』東京：東京大学出版会。

高田 勝・大島新人

2008 「野鶏と人の文化誌」秋篠宮文仁・西野嘉章編『鳥学大全』pp. 174-185, 東京：東京大学総合博物館。

West, B. and B. Zhou

1988 Did chickens go North? New evidence for domestication. *Journal of Archaeological Science* 15(5): 515-533.

Zeder, M. A., E. Emshwiller, B. D. Smith, and D. G. Bradley

2006 Documenting domestication: the intersection of genetics and archaeology. *Trends in Genetics* 22(3): 139-155.

Zeder, M. A., D. G. Bradley, E. Emshwiller, and B. D. Smith (eds.)

2006 *Documenting Domestication: New Genetic and Archaeology Paradigms*. University of California Press.